特別史跡　遠江国分寺跡

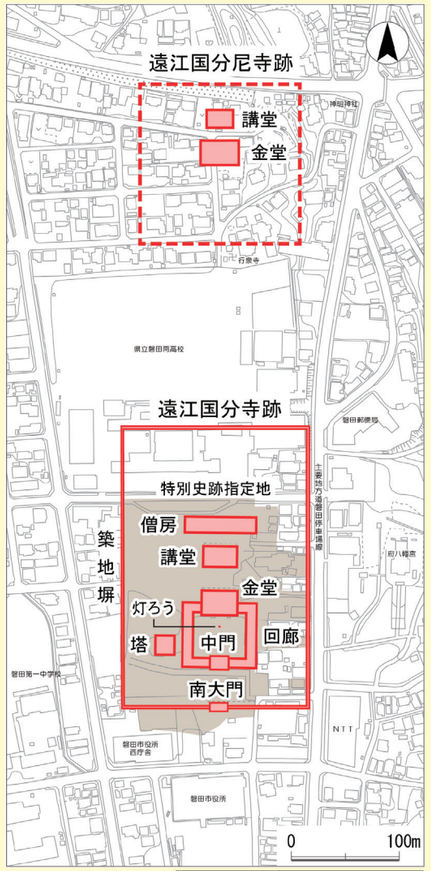
天平 13 年（741）、聖武天皇は仏教の力で当時の社会不安を取り除こうと、全国に国分寺と国分尼寺を建てるように命令しました。

遠江国では、当時国府（現在の県庁にあたる役所）があった磐田の地に国分寺と国分尼寺が建てられました。

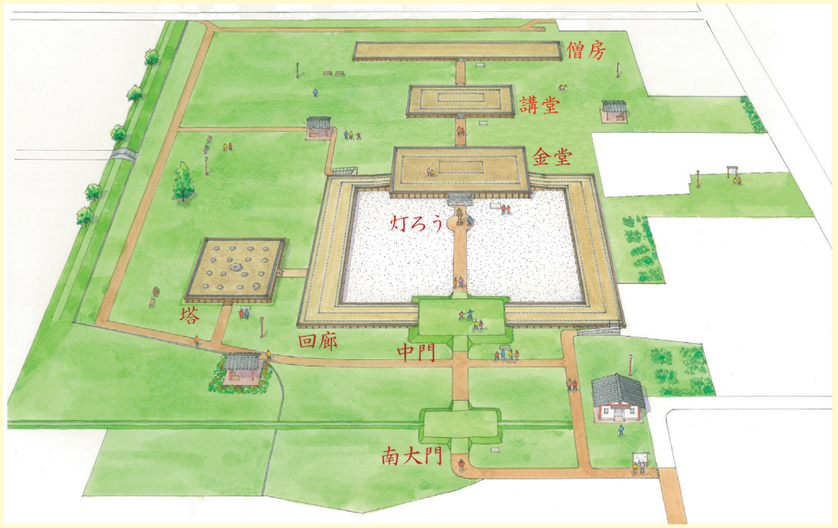
遠江国分寺は災害や時間の経過により、その建物を失いましたが、地下にはその痕跡が残されており、大正 12 年（1923）には内務省（当時）から史蹟保存地として指定されました。昭和 26 年（1951）に実施された発掘調査（第1次調査）では、遠江国分寺の金堂や講堂、回廊などが発見され、全国の国分寺の中でも初めて主要な建物の配置が明らかにされました。この成果から翌年（1952）には、国から特別史跡に指定されます。昭和 40 年代には、全国の国分寺に先駆けて史跡整備も行いました。

その後、平成 17 年度より遠江国分寺跡では、再び整備事業が進められています。再整備に伴う発掘調査により、遠江国分寺は南北259m、東西172mの範囲が築地塀によって囲まれており、その中に木装基壇を有する金堂や塔、講堂などが建ち並ぶことが明らかになりました。

また、金堂の正面には木製の柱をもつ灯ろうがあったことも発掘調査で判明しています。



国分寺・国分尼寺位置図



再整備イメージ図

【詳細はこちらから】

整備工事の様子

整備事業について

最新の調査･研究成果に基づき、磐田市では平成 28 年度に『整備基本計画』を策定しました。計画においては、地下に眠る遠江国分寺の痕跡を保存し、次世代に継承していくことを大前提としつつ、かつて遠江国分寺がこの地にあったことを体感できる史跡整備を目指しています。

その方針の下、令和3年度より現地にて整備工事に着手し、令和4年度には講堂と僧房の木装基壇が完成しました。令和5年度は金堂の整備工事を進めており、来年度以降には塔や回廊基壇などの整備も行っていく計画です。皆さまには、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、完成を楽しみにお待ちいただけましたら幸いに存じます。

令和６年２月 10 日　磐田市教育委員会　教育部　文化財課

特別史跡　遠江国分寺跡
金堂整備工事見学会

国分寺の
本尊が安置され
寺院の中心であった金堂

※イラストはイメージです。復元は金堂の土台にあたる木装基壇のみおこなっています。

金堂

金堂は、本尊となる仏像を安置する寺院の中心で、さまざまな儀礼の場にもなる建物です。発掘調査で出土した瓦の分析では、国分寺の中でも初期に建設が始まったとみられ、その重要性がうかがえます。

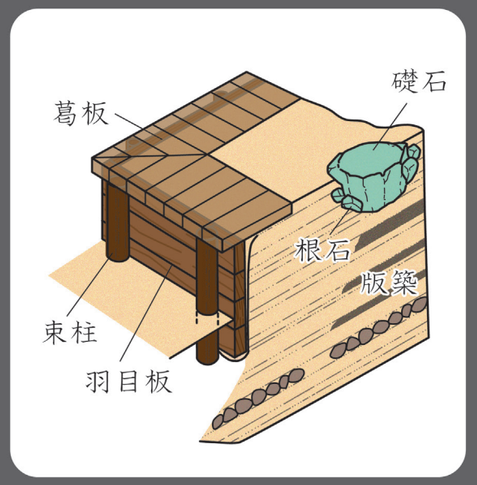
また、遠江国分寺では金堂の両側から回廊（複廊）が延び、金堂前面に儀礼の場となる閉鎖的な空間（金堂院）を作っています。

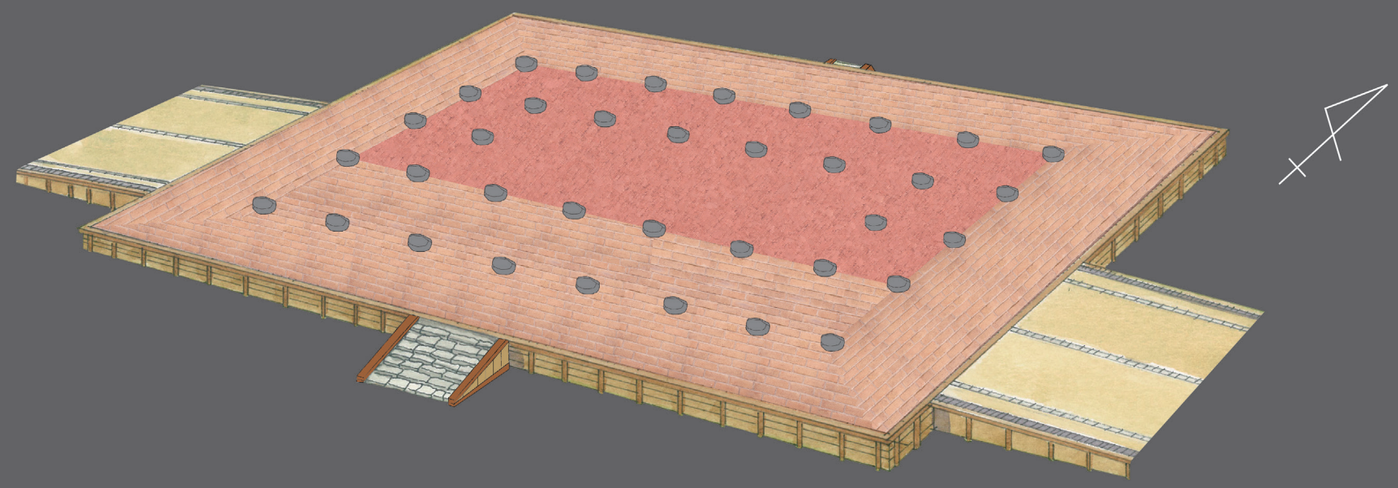
金堂建物の復元検討にあたっては、回廊と接続する正面部分の壁をなくし、金堂正面における一体的な空間利用を想定しました。同じような構造には、唐招提寺金堂（奈良）があります。

木装基壇

発掘調査では、東西 33.5m× 南北 22.9mの木装基壇が確認されました。何度も改修が行われた痕跡がみられ、基壇も真四角ではなく、やや歪（いびつ）な形状をしています。

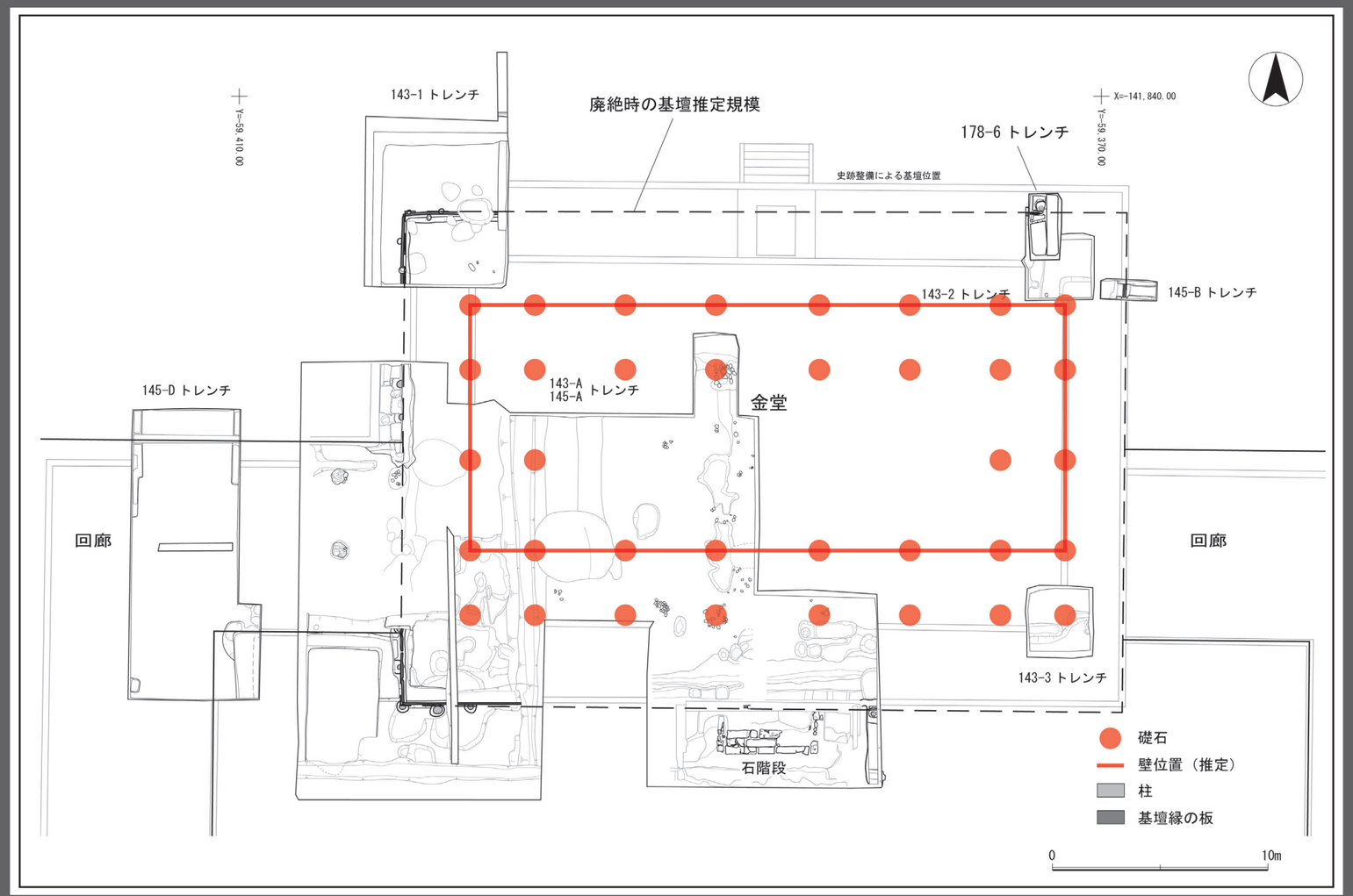
また、『類聚国史（るいじゅうこくし）』には弘仁 10 年（819）に国分寺焼失の記事がありますが、その際に焼けたとみられる木装基壇の部材が発掘調査で見つかりました。





復元基壇：東西 33.5m× 南北 22.9m　高さ（南側）1.0m
礎　　石：36 基（うち4基伝存）

金堂基壇復元イメージ図



金堂発掘調査平面図

礎石

礎石は、建物の柱を支える土台となる石です。遠江国分寺跡には、金堂のものと伝えられる礎石が4基残されています。

整備では、伝存する4基の礎石を活用しつつ、不足する部分は擬石コンクリートで復元した礎石を配置します。

階段

金堂南面で石階段が3段分発掘調査で見つかりました。復元すると、当時は6段（基壇上面の葛板含めると7段）あったと推測されます。

整備では、本来の石階段を地中に保護し、その直上に擬石コンクリートで復元します。

塼

古代のレンガやタイルです。金堂や塔などから数点出土しています。

遠江国分寺では、基壇上面に敷き詰められていたと推測しており、整備でも金堂や塔でその様子を復元していきます。

遠江国分寺跡（塔跡）出土塼